



2019

付中通信第11号

カルタ大会

2020.1.30

高水高等学校附属中学校長 宮本 剛

…来ぬ人をまつほの浦の夕なぎに 焼くや藻塩（もしほ）の身もこがれつつ
年が改まってすぐ、「百人一首カルタ大会」が開催されました。1月18日の土曜日でした。
付中新年の恒例行事です。たぶん、30km 遠足と並んでカルタ大会は付中で最も古くからある行事だと思えます。いつ始まったかは諸説あるようですが、公式には今年度第52回ということにしています。

大会の冒頭、校長挨拶の中で、私はいきなり「来ぬ人を」と語り出しました。生徒たちはすでに源平合戦の要領で分かれ、座っていましたが、すぐに何人かが「まつほの浦のゆうなぎに」と声に出して反応してくれました。そして再び私が、「来ぬ人をまつほの浦の夕なぎに」と上の句を復唱すると、今度は人数が増えてよくわかる声で「やくやもしおのみもこがれつつ」と合唱が起きました。

この歌は小倉百人一首を編んだ藤原定家の作品です。百人一首の歴史的な意義とそれにつながる本校のこの大会が、いかに価値ある行事かを説明するために、私は定家の歌を選び出して披露したのです。今年は2年生のチームが1位2位を独占し、最上級生が敗れるという波乱に満ちた大会となりました。昨年優勝の現高校1年生チームを迎えた王座決定戦でも圧倒的強さを発揮し、初めて2年生が王座を獲得しました。新たな歴史が作られた大会ともなりました。



【今の「松帆の浦」(グーグル地図より)】

賞品の盾を渡した後になって、私はこの定家の97番の歌を改めて鑑賞していました。作者は、鎌倉時代、新古今集の選者でもあり、父俊成とともに日本の和歌の世界を代表する天才歌人です。しかし、考えてみると、いろいろ不思議な歌です。

前時代には和歌の修辞の完成をみましたが、この歌にも掛詞、序詞、縁語、本歌取りといった高級な技法がらんだんに盛り込まれており、古典学習の最適な題材となっています。定家

の和歌の理念は大変むずかしく、風雅な情趣を余情のある表現によって詠み、自身「有心体（うしんてい）」と名付けていました。

しかし、私がおもしろいと感じるのは、なぜ京の都で生活しているはずの定家が、松帆の浦



（淡路島の北端に位置する本土に最も近い浜）の夕暮れ時の光景を詠めたのか、しかもなぜ恋い焦がれた男を待つ、うら若い娘に仮託して詠んだのか。「来ぬ人を」待つこの女は浜にいて藻塩と関わりがあるわけだから、彼女は貴族ではなかったはずなのです。

【今の「松帆の浦」からは明石大橋がこんなふうに見えます
（グーグル地図より）】

百人一首に選んだ定家自身の一首が、なぜこれほどまでに定家自身の身分や性別、そして生活環境とかけ離れた題材の歌でなければならなかったのか、それが本歌取りの歌だとしても、不思議としか言いようのない歌です。

退屈な人には退屈な文章だと思うので、もうそろそろ止めにしますが、最後に。

中2の時、百人一首のテストのために死苦八苦して覚えた歌でしたが、当時まったく意味が分かりませんでした。この歳になってようやく、「娘」の心情が手に取るようになります。

天才の詠んだ誰にも真似できない、すばらしい歌だということも。

「松帆の浦の夕なぎの時に焼いている藻塩のように、私の身は来てはくれない人（男）を想って、恋い焦がれているのです」

現代語に訳してしまえば、こんなことなのですが、訳さずに心の中で唱えた方がよほど身に沁みます。